

赤羽モンマルトル

司 修



アムトル



河出書房新社

赤羽モンマルトル

昭和六十一年四月十五日 初版印刷
昭和六十一年四月二十五日 初版発行

著 者 司 修

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十二

電話 四〇四一・二〇二一（営業）
四〇四一・八六一一（編集）

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印 刷 株式会社 亨有堂印刷所

製 本 小泉製本株式会社

©1986 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

ISBN4-309-00427-X

目次

巴里館 5

天道虫 57

ウストロカ 87

赤羽モンマルトル

迷走 171

装画 大野五郎
愛宕山画廊刊
「大野五郎画集」より

赤羽モンマルトル

巴里館

一

〔空室アリ美室格安先着順！ 巴里館←スグソコ〕

新二は、ポストンバッグ一つを持っただけで、当てずっぽうに降り立った駅前で、黒く焼け焦げたような木製の電柱に貼られたビラを読んだ。コールタールが塗られているようだが、亀裂が深く出来ていて、火に焙られたような電柱だった。上を見ると、土鳩が一羽、みすぼらしい姿で電線に止まっていた。その隣りには、黒い風糸が、髪の毛のように絡まって風に吹かれている。何年か前から、ずっとそうしたままのような糸。何処ともなく飛んでいった風は、破れて骨だけになっているか、知らない子供が新しい糸をつけて風に乘せているか、あるいは自

力で飛べるようになって海を越えたかだ。新二は矢印に押されて歩いた。駅舎が終わると踏切が見え、突き当りに天井やら支那そばなど食べさせる一杯飲み屋があり、そこから右へずうつと商店が並んでいた。そこに巴里館のビラはないが、新二は商店街の方へ歩いていった。新二の田舎の商店街は、戦災で焼けた跡に建ったものだが、この町とよく似ていて、新二には都会に來た感じが薄かった。洋品店、菓子店、軽喫茶、映画館、銀行などが行儀よく並んでいた。

田舎と違うのは、果物屋の屋根に、教会らしい尖塔の先が見えていることだった。商店街が切れる十字路の左角に薬局があつて、精力剤の黄色い宣伝ビラが、ガラス戸の全てに貼つてあつた。隙間から中を覗くと、白衣を着た厚化粧の女店員がいち早く新二の眼を捕え、微笑を送つて來た。生き馬の眼を抜くような女だ、と新二は思った。女店員から逃れた眼の先に木製の塵箱があつて、そこに巴里館のビラがあつた。妖しげな女店員が居なければ分からぬ場所だった。

「空室アリ美室格安先着順！ 十字路渡レマッスグ↑」

大きな十字路を渡ると、商店街がなくなり、焦茶色の木造の仕舞屋になった。道も狭く、商店街とは年代の違う家並であることがわかつた。新二の田舎の家も戦火にあつていて、家の北側の三メートル幅の道一つで、焼夷弾の火を免れた家と全焼した家とに分けられた。子供ながらその明暗が複雑な気持ちにしたのを覚えてゐる。この道も、もしかするとそういう運命の道だったのかもしれない。駅前の電柱も、燃えてなお残つたものだろう。運のいい柱なのだ。仕舞屋の道をしばらく行くと、道は二つに分かれ、右手が普通の家、左手が昔ながらの、小さな店

屋になっていた。店屋の始まる人形店の前の電柱にビラがあった。

「空室アリ美室格安先着順！ 手ニ職アル方歓迎←」

「こいつは困った」と新二は思う。手に職どころか、当座の職業すらない。手持ちの金も三カ月がやっとだった。かといって、いまさら引き下がれない気分になっていた。「歓迎」であるから、失格ではないはずだ、と新二は自ら念を押した。人形店の隣りは下駄屋だった。店先に腰を下ろした頑固そうな禿頭の親父が、鼻緒の紐を口にくわえて締めている。見るからに下駄屋らしい顔をしている。新二の田舎の家の前も下駄屋で、角ばった下駄と同じ顔の茂造さんが居た。「地雷」とあだ名がついた茂造さんは、遊んでいる子らが嫌いで、怖い顔をして怒鳴ってばかりいた。戦後、かみさんが赤痢で死ぬと、数日後にあっけなく茂造さんも逝ってしまった。あの頑固で怒りんぼも、意外に芯は優しくかったのかもしれない。

豆腐屋、作り専門の泥鰌屋、メンコまで売っている昔ながらの駄菓子屋、魚屋、花屋、肉屋、どの店に居る人も、みんな売り物の顔を持っていた。泥鰌屋の親父など髭がないのが不思議なくらいだ。この通りは、新二の、焼けてなくなった少年時代が蘇るようだった。店屋の間の路地から、ケイ坊やタッチャンが飛び出てきて、突き飛ばして行きそうだった。B 29が、昼でもゆうゆうと頭上を飛び、新二らは木の枝の鉄砲で敵の飛行機を撃ち落す夢を見ていた。あの頃の、仲間外れにされて味わった孤独感や、飢えの悲しみは覚えていても、戦争という怪物を、少年時代から引き出すことがむずかしい。太い紐で括られていながら、心は糸の切れた舩だっ

たように思える。無意識の自由、素晴らしかった時。新二はそんな風に考えながら、懐しく思わされる通りを歩いていて、駅前の電柱の、煤黒い風糸を睨にした。

昔ながらの店並が終わると、国道らしい、トラックの通る道に出た。寒々とした景色だった。機械が通るだけの道だから、そんな風に見えるのだろう。それにしても、「スグソコ」にしては遠いと、さっきから新二は思っていた。こうやって惹かれてきたのも、ビラが面白かったからだ。通りを突っ切った対面に、工場を改造したような市場があった。市場のスレートの壁に、巴里館のビラが貼ってあった。新二は、スピードを上げて行き来するトラックを避けて走り、ビラの前に行った。

〔美室格安先着順労働ニ喜ビ持テル人歡迎　巴里館　市場横入ルスグへ〕

「馬鹿にされているようだ」

と新二は思った。童話で読んだことがある。メモを見ながら、その通りにして扉を開け開け進んで行くと、最後に食べられそうになる話。よく見ると、ビラの貼られてあるのは、市場の壁にビス留めされた木製の看板の上だった。陽焼けして、スレート壁と同じ色になった板に、墨の文字が消え入るように残っていた。

内科

外科

麻酔科

レントゲン科

こんな順序で書かれてあるが、最後の科目は、

ジステンパー 狂犬病予防注射

家畜全般 巴里獣医科病院

とあるのだから、人間も家畜も両方診察するような看板である。

「家主は獣医だったのか」

と新二は自分にも看板にも少しあきれて、あきれついでにビラをもう一度読むと、矢印にしたがって市場の横を入っていった。路地を十メートルほど行くと、獣医科病院ではないが、一見して巴里館と見える建物の前の広場に出た。正面は芝居小屋のようだが、裸の女の絵が入口の前に二つ立っていて、ストリップ劇場のようでもある。二階の壁が青白赤の三色で、フランスの旗のように塗り分けられていて、どう見ても気狂いじみていた。そして劇場の左手に、「美室」とはとも思えぬ、アパートらしき箱形建物があった。

二

新二の部屋は、結婚式場であり、映画館であり、ストリップ劇場でもある母屋に、寄りかかるように建ったベニヤ造りのカスバの一室だった。映画『望郷』で見たアルジェリアのカスバは、もっと立派だった。三畳一間、小窓一つ、床は焼けて茶色い畳敷、押入もない。「格安」

だけが本当だった。床は、北から南にかけて勾配があるため、東側にある窓を見て坐っていると、北側へ倒れてしまわなければ、体に無理な力が働いて苦しくなった。壁に、見たこともない女優の笑顔つきカレンダー、原節子主演の映画ポスターが貼ってある。押すと、ペコッとへこむベニヤ板の壁。隣室のヒソヒソ話まで聞こえる。付け足し付け足しで部屋が増えてきたのか、一メートル幅の廊下は、部屋の区切りごとに段がついて、幅も柱一本分広くなったり狭くなったりしていた。一階だけで十五、六は部屋があるようなので、二階も合わせると、二十や三十は間数がありそうだった。所々に、病気の螢のような豆電球があるが、昼でも暗い廊下。部屋の一つ一つが、生きもののように微動している感じ、それはアパート全体の外観からいえた。建物というよりは、みの虫や鳥の巣を思わせた。窓もまちまちの大ききで、トタンの波板が縦横斜かに釘打ちされ、木切れがこまごまと押さえ打ちされて、複雑な影を作っていた。アパート全体が巨大な扉を想像させる「美室」群であった。家主の鷹野モモは八十歳と聞いたが、見た目には七十そこそこで色艶もよく、肌は若い人のようにきめ細かだった。それがかえってグロテスクに見えた。モモという老婆の名はふさわしくなかった。下にババをつけ、モモババという方があっていた。後で、アパートの住人や、劇場の人たちが同じように言っていた。自分もそのように思うのだろう。モモババは部屋のことより美容術について長々と話した。自分の肌が年取らないのも、モモババの考案した特種なクリームとイチジク風呂の効用だと、白い半袖シャツの前をぱっと開いて胸を見せ、

「触ってみなさい」

と言った。新二が眼を丸くして辞退すると、モモババは新二の手を素早く取って乳の上に乗せた。新二は驚いて手を引いたが、老婆の皺っぼい肌とはうらはらに、娘のような弾力のあるすべすべの感触が手に残った。新二はそれからというもの、モモババの催眠術にかかったように、出身地、親子関係、職業、趣味、恋人の有無に至るまで、自分でも驚くほどよく喋った。

「わたしのことは今後先生と呼んでくださいな」

とモモババが言った時、ようやく催眠から覚めたようだった。入居するにあたっては、権利金や敷金一切なく、二階に増築中の大工の手伝いか、ペンキ塗りをしてもらいたいと言った。それが当り前のように聞こえたのも、モモババの暗示にかかっていたのかもしれない。終戦直後の一時期は、映画館が住宅をなくした人たちの仮の宿だったそうで、その中に居た大工がモモババに申し出て建て始めたのが、このアパートの誕生だったという。以後は、入居者の出入りで増えたいらしい。大工の素質のない者が造った部屋もあることだろうから、場所によっては潰れかねないが、考えようによっては、素人だからこそ、柱や梁を多く使って頑丈なのを造っているのかもしれない。造っていいのかもしれない。

新二が巴里館に入居してすぐに、大きな台風に見舞われた。朝からの強風は、夕方から雨を伴って押し寄せ、巴里館を楽器のように鳴らせたが、一階の新二の部屋は雨漏りもなく、きしむ音と隣室の夫婦者の長い戯れの声で台風は過ぎ去った。巴里館は数枚のトタン板きり被害が

なかった。もっとも、剝がされた部屋の住人は、直接風雨を受けたのだらうから、大変なことであつた訳だが、修復も簡単だったのか、新二が表に出て見た時は、カスバのどの壁も破れてゐる所はなかった。何も起らなかった様子は、新二が巴里館に住んで以来感じてゐる不思議さに通じていた。暗い廊下を通る時、一部屋一部屋がどことなく別な動きと呼吸を持っていて、住人の表情が見えるようなのに、人の姿を見ることがなかった。

台風のあつた翌日の日曜日に家主の先生から、お集まり願いたいと、昔ながらの回覧板が回つてきて、映画館に集まつた。部屋の被害の報告が、集まつた人たちからなされ、新二は一人一人の顔を見たが、どの人もこの十日間程に見かけたことがなかった。家主の先生は、大学ノートにメモをとり終わると、木材採取の御協力を願いたいと、役者のような丁寧なおじぎをした。十七、八人の住人はみな男だった。どこか風采の上がらぬ姿が多い。巴里館を出て、駅と反対の道を、先生が先頭になって歩いて行つた。家並は、普通の二階家が多く、焦茶色に陽焼けた板壁を同じ色の板塀が囲んでいた。巴里館の異色さがはつきりする。こんな辺鄙な所に劇場が成り立つのかと、何も知らぬ新二でさえ氣になった。駅までの道は何度か往復したが、町はずれのその道は初めてだった。十分程歩くと、運河の堤防に突き当つた。鉄の手摺りのついた橋を渡ると、大きな河が三本見え、赤茶色の水がふくれ上がって流れてゐた。河の一つは人工的に分けられたものらしく、コンクリート製だった。あとの二つは、自然に分かれてゐるもので、増水したにぎり水が、表面はゆったりと、しかし所々に渦を作りながら、力を隠して